

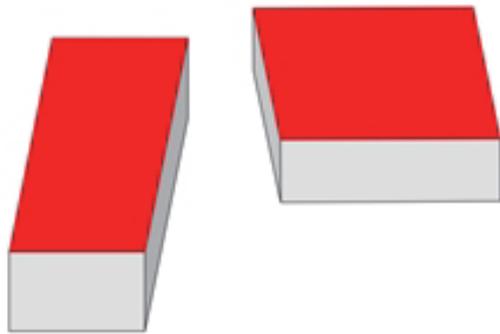
# 「偏見は不要」

～まっすぐ向き合う～

使徒 10:1～17

ある人が、用事があったため急いで車で家に帰り、ガレージを開けました。そこに自分の車がないのであわてて警察に通報しました。自分が乗っていたのですから当然です。私達は焦るとこのように訳のわからないことをしてしまいます。

焦るのは「車はガレージにあるはずだ」と決めつけているからです。自分の価値観で決めつけることを「偏見」と言います。自分に偏見があるということを自覚していないと、自分が普通であると人は思い込みます。自分が普通だと思えば相手の行動や考え方を理解することができません。また、相手の価値観が違うことを理解していないと、何気なく言った言葉で必要ないほど嫌な気持ちになります。私達は皆それぞれ経験したことで価値観を作り上げてきたのです。普通の人はどこにもいない、皆違うのです。



上の図を見てみてください。どちらが大きく見えるでしょうか。色のついた面を切りとって重ねてみると、実はこの二つの図形は全く同じ形なのです。このように、私達は目の前のことでさえ、偏見を持って見れば正しく認識できないのです。自分が普通だと思っていることは自分の住む狭い世界の中では「普通」かもしれませんが、文化が違えば、国が違えば「普通」は全く違うのです。教会では全ての子どもを育てるように家族として関わりますが、子ども達を大人の価値観で「普通」に当てはめてしまわないように、多様な考えの中で、広い世界を見させてやりたいものです。私達の価値観はルールによって作られています。子ども達をルールで言い聞かせようとすると「ダメ!」が多くなります。その子がとった1つの行動が悪いことでも、そうなった状況は毎回違うはずで、同じルールで良いか悪いかを判断しなければならなければ、「ダメなものダメ」としか言いようがないのです。子ども達にはルールで善悪を教えるではありません。子ども達に教えなくてはならないのは「良心」なのです。

## ■ コルネリオとペテロ

コルネリオは異邦人でしたが、自分が置かれている状況の中で、忠実に神に仕えようとしていました。ユダヤ人のように、はっきりとした啓示を受けていませんでしたが、自分の知っていることについては、それを守り行っていました。ある日、幻の中で御使いが現れて「ヨッパに人をやって、シモンを家に招きなさい」と言われると、状況も理由も分からず、即座に応答しました。一方、ペテロも夢ごこちに主の声を聞きました。大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来て、その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、ほうもの、また、空の鳥などがおり、主は「ほふって食べなさい。」と言われました。主を心から愛し、主に従っているペテロは「主よ、それはできません。」と答えました。地上の生き物の中に食べてよい物と食べてはならない物とが分けられてあり、その区別なしに食べてはならないと書かれていたからです。(レベ 11:4～23)。律法即ちルールに縛られていたペテロは神がそれをきよい物としても従うことができなかつたのです。

## ■ 素直に聞くことができているか

1日の中で悩む時間がどのくらいありますか。振り返ってみて祈る時間と悩む時間はどちらが多いでしょうか。忙しいと思っていないですか。忙しいと思っているのは悩んで

いることが多いからでもあるのです。悩んでいると次々に思いが巡り忙しいのです。自分の古い価値観や慣習に支配されている時は、ペテロのように神様の声が素直に聞けません。特に経験があること、これは間違いなく自信があると思う時には気をつけなくてはなりません。私達はルールによって判断するのではなく、その時その置かれた場所です。今神様がせよと言われていることに従わなくてはなりません。自分が正しいと思って持っている価値観が偏見ではないのか、聖書を読んで神様が伝える正しい思いと比べてみてください。礼拝でメッセージを聞く中で素直に聞けない箇所があるなら、聖書の価値観と私達のルールが違うのです。その時にこそ聞かなければなりません。良い時があるのは、自分が良くしたからではなく、恵みです。自分の偏見を取り除き、自分の価値観での行いを取り除いて正しく自分を保っていれば、良い時は水路のそばに植わった木のように続くでしょうが、主の教えを喜びとせず、自分で良くしたと思って過ごしているなら、また、向き合わなければならぬ時がやってくるでしょう。良い時には問題がないので教えを素直に聞けません。しかし、問題を解決しないままでは、同じ問題はまた繰り返されます。これは神様の定めた法則です。「人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」(ガラテヤ 6:7-8) 偏見を取り除いて素直に聞きましょう。「聞く耳のある者は聞きなさい。」(ルカ 8:8) また、「誰でも、聞くのに早く、語るのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。」(ヤコブ 1:19) 聞くことが大切であると聖書には繰り返し書かれています。

## ■ 今語られた御言葉を行う

誰かから忠告を受けた時に素直に聞いて行うことができますか。褒めてくれる言葉、心配してくれる言葉は喜んで聞けますが、忠告は聞きにくいものです。自分のことを心から思ってくれた言葉を素直に受け入れることができるようになりたいです。「ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実を持って愛そうではありませんか。」(1ヨハネ 3:18) 向き合って祈りあって、解決することが隣人になるということ。大切な隣人が私達を愛して伝えてくれる神様からの忠告を素直に聞き、行いましょう。

## ■ 山羊と羊の例え

聖書の終末論を読んでみてください。書いてあることがすでに起ころうとしています。終わりの日が来た時に忠実に聞くものは引き上げられ、聞かないものは振り落とされる、と羊と山羊に例えて書かれています。(マタイ 25:32～46) どんな状況にあっても小さな一人にしたことは私にしたことであると神様は言われています。その人はこの地にあっても必ず報いられると約束されています。怖れを原動力となる信仰を持つことを目的で伝えられたものではありません。素直に聞く耳を持ち、神様の愛に立って生きなければならぬのです。もう悩まないでください。悲しまないでください。自分のために生きるのをやめましょう。私達は自分の力で髪の毛1本でも生やすことができません。悩んでも悲しんでも解決することはできないのです。自分のために自分のことを心配する必要はありません。「あすのための心配は無用です。あすのことは明日が心配します。労苦はその日その日に、十分にありませぬ。」「神の国とその義をまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えてこれらのものはすべて与えられます。」(マタイ 6:25～34) もし畑に私達の価値観で勝手な種をまいて悪い実がなったら、十字架で私達の罪を贖ってくれたように神様は刈り取ってくれるのです。それでも荒れた畑が実を結ぶ畑になるまでに何年かかるのでしょうか。すぐには変わりませぬ。土が変わらなければよい実はなりません。勝手な行いで悪くしてしまった土がよい土に戻るには時間がかかるのです。できることはただ聞くことです。「信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストについての御言葉によるのです。」(ローマ 10:17)

(要約者:藤原 友規子)

(6月5日)